

城北信用金庫アスリート職員の強さの源に迫る

ATHLETES ZERO

三度目の挑戦

「『楽しい』を原動力に」

アスリーツ ゼロ

2024

永野元佳乃
アイスホッケー

JOHOKU
ATHLETES
CLUB



アスリートの素顔をチラ見せ

宝登山 497.1M 環境庁・埼玉県

友人と毎年恒例の登山

就寝前に本で勉強

ゆくゆく挑戦したいコーチングを学ぶために、サッカーの本で勉強中！寝る前に軽く読める小説も欠かせません。

JOHOKU ATHLETES CLUB

競技が違っても一つのチーム。皆が頑張っているから私も頑張ります！

マネージャー

アスリートマネージャーより

いつも Johoku Athletes Club (JAC) を応援してくださり、ありがとうございます。

JAC の公式サイトでは所属アスリートの情報を日々更新していますので、ぜひ一度ご覧ください☆

Instagram @jac_manager

JAC HP <https://www.johokuathletesclub.jp>

アスリートの大会告知や公式ブログ、インタビュー、メディア出演など多数の情報をホームページに掲載しています。

城北信用金庫 Johoku Shinkin

何度も涙を流してきた。何度も挫折を味わった。しかし、そのたびに立ち上がり始めた。今、2026年に開催される4年一度の夢の舞台を目指して、一步ずつ歩みを進めている。

「2025年2月から始まる予選に、全てを懸けています。難しい大会になると思いつつも、しっかりと勝ちきって本戦につなげたい。自分の強みを活かして、チームに貢献したいです」

難しいほど面白かった

アイスホッケー

アイスホッケーを知ったのは幼稚園の頃。地元、大阪府のクラブチームに入ったのが小学校1年生のとき。スケートをしながらスタイルでパックを打つのは予想以上に難しかつたが、それがむしろ面白かった。

「難しいことにチャレンジするのが樂しくて夢になりました。初めてゴールにシュートを決めた爽快感は今でも覚えていきます」

世界最大のウインタースポーツの祭典を見て、自分も出場したいという夢を抱いたのは8歳のとき。ここから永野元選手の人生は大きく動き出していく。高い競技レベルを求め、中学2年生で父以外の家族4人で北海道苫小牧市に移住。同年、女子アイスホッケーの名門チーム、三星ダイヤペリグリン（現・道路建設ペリグリン）に入団する。チームには日本代表選手が何人もいてレベルの差を痛感したが、夢に一步近づいたワクワク感のほうが大きかった。

「最初は必死でしたが、中学、高校の頃は



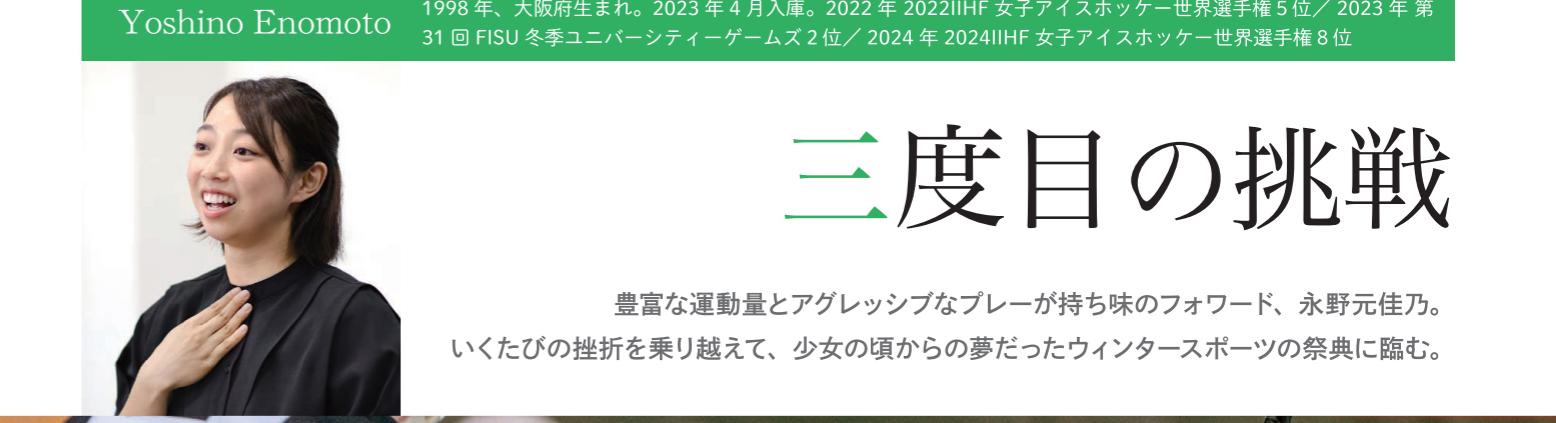
1.初めてユニフォームを着て試合をした小学1年生。「楽しみより緊張が勝っていました」 2.19歳から所属する『SEIBU プリンセスラビッツ』。女子リーグと全日本選手権ともに昨年同様優勝を目指す 3.昨年開催の世界選手権。世界ランキング1位のカナダ相手に果敢に挑んだ 4.2022年開催の世界選手権にて、大逆転の引き金になった得点を決めた瞬間。チーム最高順位の5位を記録した、永野元選手にとって最も印象深い一戦

Yoshino Enomoto

1998年、大阪府生まれ。2023年4月入庫。2022年2022IIHF女子アイスホッケー世界選手権5位／2023年第31回FISU冬季ユニバーシティゲームズ2位／2024年2024IIHF女子アイスホッケー世界選手権8位

三度目の挑戦

豊富な運動量とアグレッシブなプレーが持ち味のフォワード、永野元佳乃。いくたびの挫折を乗り越えて、少女の頃からの夢だったウインタースポーツの祭典に臨む。



無限に体力があつたし、毎日他の選手の倍は練習していたので乗り越えられました」
言葉のとおり、スピードと豊富な運動量を活かしたアグレッシブなプレーが持ち味。中学3年でU18日本代表に選ばれ、憧れだつた代表のユニフォームに袖を通した。高校3年でアイスホッケーの本場、カナダのオンタリオホッケーカデミーに留学を決断。そして当時チーム最年少の18歳で日本代表に選出される。

2018年の夢の舞台への最終予選は3連勝で見事突破。夢に手が届きかけていた。

しかし、思いがけない知らせが届く。代表落選。大舞台に立つことは叶わなかった。「予選では結果を出させていたのですが、その後の国際試合で活躍できませんでした。結果を残せなければ出番が減り、焦ると結果が出ない。悪循環でした」

19歳だった永野元選手は泣き続けた。
「これまで若さによる爆発力をアピールしていましたが、もっと自分の強みを探す必要を感じました」

ここから永野元選手は、自分の強みを探し求める迷走期に突入する。

21歳、日本代表に再選考されたものの、休んでいたブランクを埋めることができず、ドウ病を発病。運動を禁止されて治療に専念した。3ヶ月で復帰したものの、休んでいたブランクを埋めることができず、2022年の夢の舞台への切符も掴み損ねてしまふ。チーム最年少だった永野元選手

は就職活動をする年齢を迎え、競技を続けるかどうかの岐路に立っていた。

「競技をやめるかどうか悩みました。でも、シーズンが再開して久しぶりにアイスホッケーをやつたらすごく樂しかったんです」アイスホッケーは楽しい。これは永野元選手の原点だった。

「8歳から夢の大舞台を追い求めすぎて視野が狭くなっています。このとき一気に視野が広がったんです」

自分の強みは、自らが犠牲となつてチームメイトを活かすことだと気づくこともできるなかつた時期のことを噛み締めながらプレーしている。それがいいプレーにながっていると思います」

2023年、城北信用金庫に入庫。城北の社会人アスリートとしての強みを活かす方針に強く共感して入庫を決めた。

「入庫前に職員の方が全日本選手権の試合を帯広まで見に来てくれたって感激しました。大前理事長には『世界での活躍を期待しています』と声をかけていただき、スイス留学も快く送り出してくださいました」

日本代表の最年少選手としてあどけない笑顔をふりまいていた少女は、今やチームの中心として後輩たちを支える立場となつた。

「チームのことを考える時間が多くなりました。実力のある若い選手に負けないよう、成長し続けたいと常に思っています」

今一番大切にしているのは「アイスホッケーを楽しむ」こと。原点を大切にしながら、今まで世界の大舞台を目指す。

スイス留学ではフィジカルの強さと自らチャンスを切り開くマインドの強さを得た。今は2026年の夢の舞台に向けて準備を



5.2023年3月に帯広で行われた全日本選手権には、家族と城北の職員が応援に駆けつけた
6.アスリート職員として参加した特殊詐欺撲滅運動やSDG's祭り。地元の方と交流を行った